we support↓
RQ 災害教育センター
MONTHLY
「東北に黒船を送ろう！大作戦しんぶん」改め
復興支援かわらばん『すけさきた』しんぶん
「すけさきた」とは宮城県登米市あたりの言葉で「ボランティアに来たよ」という意味である
MAY 11 2021

避難のカスケード（滝）②避難できなかった人の傾向も明らかに

東日本大震災では、地震発生から津波到達まで 30 分から 1 時間ほどの時間がありました。
どうすれば避難することができるのか。何が生死をわけたのか。
今、津波避難の専門家が注目しているのが、“ 避難のカスケード ” です。※カスケード：連なった小さな滝、連鎖的に物事が生じる様子

（3月9日　NHK NEWS WEB）

命を救う「避難のカスケード（率先避難者の行動が滝の流れのように他の人に連鎖する）」があった一方で、避難ができなかった人も多くいました。

石巻市に暮らす草島真人さんは、地震が発生した時、石巻市内を車で移動していました。草島さんは家族の安否が気になり、海のそばにある自宅に車を走らせます。

家族は自宅におらず、避難所になっている小学校へ向かいますが、「防寒具も何も持っていない」と思い**再び自宅へと向かいます。しかしこの時、すでに地震発生から1時間近くが過ぎ、津波が迫っていました。**

草島さんの目に飛び込んだのは建物の2階を超える高さの津波。

車を全速力で走らせなんとか逃げきりました。

「私の人生はこれで終わるんだなと思いました。自分のすべての行動・判断が間違えていたんだと…」

【逃げ遅れるリスク「外出先」「自宅兼店舗」】

1200人分の避難行動の調査から、逃げ遅れるリスクの高い人の傾向がわかってきました。

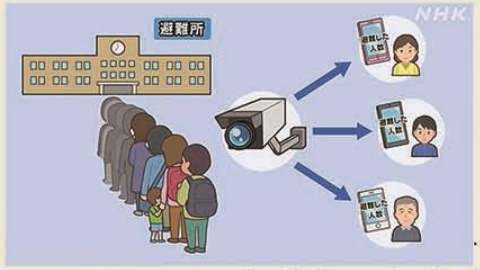
その一つが草島さんのように**「外出先」にいた人です。**

家族や、自宅の被災状況などが気になり、自宅に戻ったり家族を探したりすることで避難が遅れてしまいます。

調査からは、外出先にいた人のうち4割が津波に遭遇したなど、危険な状況にあったことがわかりました。

◀草島さんは一度は内陸の避難所に向かおうとしたにもかかわらず、海辺の自宅に戻ってしまった

震災を伝える団体と研究機関が、宮城県石巻市の門脇・南浜地区で 1,200 人から詳細に避難行動を聞き取った▼



もう一つリスクの高い傾向にあったのが、**地震発生時に「自宅兼店舗」にいた人たちです。**

「店の片付けを急いだ」「客の安全確認などの対応をした」などの理由で避難が遅れていました。

避難行動の専門家、東京大学大学院特任教授の片田敏孝教授は、こうした行動は災害時に多くの人に起こりやすいと指摘しています。

「人は、逃げないといけないとわかっていてもなかなか逃げられないものです。**人は逃げない選択を積極的にとっているわけではなく、逃げようという最後の意思決定ができずにいる状態が続いてしまう。避難というのは、行動に移すことが難しい行為**なんです」

【新たな技術で「避難のカスケード」をサポート】

東日本大震災の大規模調査から見えてきた、一人の行動が他の人の避難行動に影響し広がっていく避難のパターン。どうすれば、今後、発生が懸念される災害でいかしていけるでしょうか。

今回、「避難のカスケード」を提唱する富士通研究所の牧野嶋文泰さんは、効率よくカスケードを引き起こそうと新たな技術の開発を進めています。

牧野嶋さんたちのチームが開発したのは、避難する際に使うアプリです。

機能の一つが、**避難所に到着した人数が表示される仕組み**です。

避難所に、自動で人を認識し人数を把握するAIカメラを設置し、避難した人数をリアルタイムに表示させます。アプリを見た人に、**「みな避難している」と認識してもらい、避難を後押しするとしています。**

避難する集団を直接見たり、声がけされたりしなくても、町のいたるところで避難が始まり、連鎖が広がることを期待しています。（一部要約及び改行は文責による）

▲家族と離れて外出先にいる人、店舗兼住宅で建物の中に目が向いている人にも「みな避難している」というリアルタイムの情報を流し、避難の連鎖につなげていく狙い

次号『③自分の避難行動は知らない誰かを救っている』

資料：NHK NEWS WEB

文責：井上文子（西表島エコツーリズム協会　東北復興支援担当）